

木田市長の



ど〜んと

真珠のように輝く
まちづくりのために

コミュニケーション

vol.42

4年間を振り返って

この4年間を振り返って、月並みな言い方ですが、あつという間に過ぎ去ったと感じています。

しかし、同時に多くの思い出が残ったことも事実です。

大変厳しい財政状況の中で、解決しなければならぬ問題が多くありました。

そのような中で、わたしが最も重要だと考えてきたことは、「積極的に」かつ「プラス思考で」ということでした。

「少ない予算だから何を切るか」より、「少ない予算であるが何ができるか」ということを考えました。

悪戦苦闘しながら、白木町のし尿処理場が完成し、こどもたちに本当に喜んでもらえる鳥羽小学校も出来上がりしました。

反対が強かった入湯税も、今年年間1億9千万円もの市税となって、これからの鳥羽市のドル箱となるかもしれせん。

しかしながら、入湯税は課税することが目的ではありません。この入湯税を活用して、お客さんが自ら訪れてみたいと思うような鳥羽のまちづくりをするのが、真の目的であると考えています。

わたしの公約の中でも目玉であった高速船も、昨年「きらめき」に続いて、4月には「かがやき」が就航する運びとなりました。

世の中は進化しています。市の定期船事業も進化し、改革していかなかったら、これからの人口減少や経営悪化に対処できなくなることでしょ

う。

今、鳥羽市は人口減少が加速しています。これからの政治は、この人口減少に歯止めをかけることが大きな課題であると思います。

働く場所の少ない鳥羽市に住み続けていただくために、市民のみなさんから「鳥羽市は良い政治をしている」と言ってもらえるような努力が必要だと思えます。

そのためには、お年寄りや身体の不自由な方がたに優しい政治をすることはもちろんですが、「子育て支援」ということに真剣に取り組み、若いカッパルに「鳥羽で子育てをしたい。鳥羽で教育をした」と心を感じていただくことが重要です。

この4年間を振り返って、子育て支援というこの点が、まだ十分ではなかったと思います。

鳥羽市にこどもたちの元気な声が溢れる日が来ることを願っています。



人権文化の花を咲かせよう

Vol.82

ふるさと

「ふるさと」

辞書には、自分の生まれ育った土地、故郷、郷里とあります。

自分の心のよりどころでもあり、とても大切な場所です。本来、どこに生まれても、どこに住んでも、そのことだけで差別されてはならないのですが、生まれ育ったふるさとが、被差別地区というだけで差別される現実があります。

こうした問題に対し、よく「今の時代、もうなくなつた」とか「行政がいつまでも部落

差別を言っているからなくならない」と言う人がいますが、そうではありません。

部落差別がまだ残っているからこそ、被差別地区出身の人たちが、自分にとって大切な場所である、ふるさとを隠したりしなければならず、そのことで苦しんでいる現実があります。

また、正しい知識が備わっていないければ、自分自身が差別してしまう恐れがあります。仮に部落差別について全く触れたことのない人が、別の人から間違つた知識を植え付けられ、その人がまた間違つた知識を違う人に…というように、差別の広がりが始まってしまうのです。

そういつたことを防ぐためにも、学校では人権教育を、職場や地域では人権連続講座や部落差別問題を取り上げた研修会など、さまざまな機会を通して学んでいただきたいと思えます。

部落差別問題をはじめ、あらゆる人権問題を正しく理解し、差別をなくしていくこととする一人ひとりの輪が広がれば、誰もが住みよい社会が来る日も近いと思えます。